

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～人間における・・・『運』の研究～

前々号は『運』をよくする心得である、「惜福」・「分福」・「植福」という言葉についてでした。

この『運』について・・・経営者とかリーダー、また、勝負の世界に生きる人は、『運』に対して敏感であり、その体験から、独自の運の哲学を持っている人が多いです。

今回は、それを紹介したいと思います。では、どうぞ

WBC 日本代表監督の栗山英樹監督は・・・「一人ひとりが自分の仕事をやりつくした時、神さまが応援してくれる」と語っていた。

また、千 玄室 大宗匠（初めて日本・国連親善大使に任命された裏千家（茶道）の第 15 代家元）は小学 1 年生の時に母親から「毎朝鏡の中の自分に“おはようございます”夜も自分に“ご苦労さま”と言いなさい。」と教わり、それを今日まで続けてきたと話されていたが、そのことが、大宗匠の強運の一因を作っているのではないかと思った。まさに『神は細部に宿る』のである。

小学を 4 年生で中退、丁稚奉公から身を起し松下電器（現パナソニック）グループを興した松下幸之助も『運』についての多くの言葉を残している。松下政経塾の塾頭であった上甲 晃氏にこう言ったという。

「人間 9 割は自分ではどうにもならない運命のもとに生きている。

その運命を呪ってはいけない。喜んで受け入れる。すると、運命は良くなる」

深い言葉である。いまいる場を意に沿わないと呪っているとますます悪循環に陥る。与えられた環境に不平不満を言わず、その中で精いっぱい努力を積み重ねていくと、運命は必ず良くなっていく。氏の体験からでた教訓であろう。

また、稲森和夫氏（京セラの創業者）は運命を高める心構えとして、こういう言葉を残している。「災難や苦難に遭ったら、嘆かず、腐らず、恨まず、愚痴をこぼさず、ひたすら前向きに明るく努力を続けていく。

これから将来、良いことが起こるために、また自分という人間を成長させるために、この苦難があるのだと耐え、与えられた苦難に感謝する。

よいことが起これば、驕らず、偉ぶらず、謙虚さを失わず、自分がこんな良い機会に恵まれていいのだろうか、自分にはもったいないことだと感謝する。これが素晴らしい人生を送るための絶対条件です。」

「致知」4月号 特集「人間における運の研究」（致知出版社）より

最後に・・・『運』を語るうえで、君たちに伝えたい言葉を2つ紹介しますね。

- ・「人の道を守らない人間、親を大事にしない人間、恩ある人に砂をかける人間に『運』はついてこない」

樋口武男 大和ハウス工業 最高顧問

- ・「自分の立つことばかり考えている人はかえって滅びる。身の立つことを考えないで、道の立つことを考える。報恩の喜びを育て上げていく。そこのみ伸びる道、拓ける道がある。不思議によい『運命』に守られる。」

常岡一郎（日本の政治家、参議院議員（2期）、宗教家、文筆家。）

